

# 「OTC検査薬」一般原則の見直しについて

## ～国民と医療をつなぐ大切な存在となるために～

2023年9月6日



## 2040年問題を見据えて

- 政府や医療研究者の中でも、今後どのようにして医療需要と供給のバランスをとっていけるのか議論が進められている。
- そういった社会的課題に対して、シニア層が自分の健康を自分で守っていくことを適切に行うことができる選択肢として、OTC検査薬の活用をはかれないか、検討を進めたい。

## OTC検査薬に期待すること

1. 生活者の健康に対する関心や気づきを促す

→ヘルスリテラシーの向上につなげる

2. 生活習慣病など日常の健康管理のためのセルフ  
モニタリング・セルフチェック

→医療機関で行う検査を補完するものであり、定期的な  
患者のフォローアップにつなげる

# 国民と医療をつなぐ役割を担う薬局とOTC検査薬

## 国民(生活者)

ウェアラブルデバイスによる  
「24時間健康モニタリング」

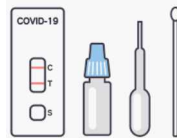


かかりつけ医による診療



## 薬局(薬剤師)

OTC検査薬による  
「セルフチェック」  
「セルフモニタリング」



薬局から健診への啓発を行うと共に、何らかの理由で健診に行けない人や健康に不安のある方には、症状に応じたOTC検査薬でセルフチェック・セルフモニタリングによる気づきを促し、受診勧奨など適切な対応を取る。

健康管理において、OTC検査薬はスクリーニングとして活用も考えられる。例えば生活習慣病で通院していても症状の安定した患者は医師の指導のもと、OTC検査薬で経過観察する方法もあるのではないかな。

公衆衛生において、自覚症状や心当たりがあっても、医療機関で検査出来ない患者に対して、感染症スクリーニングとしてOTC検査薬の活用もあるのではないかな。

医師・医療機関との連携  
・情報共有や受診勧奨

生活習慣病など安定した症状の患者に対しては、医師の指導のもと、セルフチェック等を実施

年に1回、健診を受けることを薬局からも促す

健康診断



## セルフチェック対象候補

- ①健康管理 (便潜血、血糖値、コレステロール、中性脂肪、肝機能、骨密度 など)
- ②公衆衛生 (感染症検査 など)

## 薬剤師の職能発揮のための薬学的知見に基づく継続的な指導等の方策についての調査研究

研究代表者：東京薬科大学教授 益山 光一

(以下、研究報告書35、36ページより引用)

③の受診勧奨では、例えば薬剤師が受診勧奨したことにより低カリウム血症で入院につながった事例や、患者の調子が悪く家族やヘルパーが受診させようとしたが本人が大丈夫だと言い受診が取りやめになったが、薬剤師が居宅訪問して受診の必要ありと判断し、ケアマネジャーと介護事業所にその旨を連絡し受診した結果、心不全の悪化で入院した事例や、疾患の症状や薬剤の副作用の症状には該当しなかったが、患者が訴える別の症状に着目し、受診勧奨したことで尿管結石や熱中症であることが判明した事例、尿漏れに悩んでいたが年齢的に仕方ないとあきらめて水分制限をし、便秘になった患者に他の疾患の可能性を感じ受診勧奨したことで腹圧性尿失禁であることが判明し、治療することで尿漏れも便秘も改善につながった事例など様々ある。

早期の受診勧奨は副作用等の重篤化の回避や、不安に思っても行動に移せないでいる患者の後押しにもなるので、薬学的知見により判断し、必要と認める場合には受診勧奨する。

参照：厚生労働科学研究成果データベース(2023年3月)

### 早めの気づき

#### セルフモニタリング

ウェアラブルデバイス等  
・ライフログ

#### セルフチェック

OTC検査薬  
検体測定室

- ・中性脂肪
- ・コレステロール
- ・HbA1c など

身長、体重、血圧 他

### 正しい情報を上手に活用

#### OTC医薬品ポータル サイト (OTC薬協)

##### トリアージ

- ・セルフチェックシート
- ・セルフチェックガイド  
(飲み合わせチェック)

#### OTC医薬品情報 (製品比較)

- ・成分・分量
- ・用法・用量
- ・使用上の注意



### 自分の健康医療情報管理

#### 電子お薬手帳

(厚労省一運営事業者)

※GS1コード

#### 医療用医薬品

- ・スイッチOTCがある医薬品  
フラグ

※JANコード

#### OTC医薬品

- ・セルメ税制の対象品フラグ
- ・濫用のおそれのある医薬品  
フラグ

### 申請手続きの支援

#### セルメ税制 (確定申告)

#### OTC医薬品 購入記録

(確定申告に必要な情報)

- ・購入品目
- ・購入金額
- ・日付



## ヘルスケアセルフマネジメントプラットフォーム・・・相互連結の場

・ OTC医薬品製品共通コード ・ 医療用&OTC成分共通コード

正しい選択のサポート、適切な医師・薬剤師への相談

OTC検査薬の適正な活用による生活者の予防・健康づくりの推進へ

# 現在の一般用検査薬(OTC検査薬)

一般用検査薬(OTC検査薬)とは体外診断用医薬品のうち、一般用医薬品として取り扱うことが認められているもの。一般の人が(自覚症状が現れたあとでなく)日常において自らの体調をセルフチェックすることを目的とするものであり、その検査結果から必要に応じて医療機関を受診し、疾患等の早期発見につなげることができるようにするもの。

尿糖	尿蛋白	妊娠検査	排卵日予測検査
			
1991年	1991年	1992年	2016年
尿検体	尿検体	尿検体	尿検体

新型コロナ	新型コロナ・インフルエンザ
	
2022年8月	2022年11月
鼻腔ぬぐい液、又は唾液	鼻腔ぬぐい液

## 【新型コロナ抗原検査キットに関する補足】

新型コロナ抗原検査キットは、一般用検査薬に転用となる前の2021年9月27日に厚労省より「医療用の抗原検査キット」を保険薬局で販売することを特例的に許可。

医療機関受診と感染拡大の防止につなげることで、薬事承認を受けた抗原検査キットを国民が入手しやすくすることを目的に実施。

また、研究用試薬が広く市場に出回る中、厚労省と消費者庁からは、研究用試薬ではなく、薬事承認を受けた検査キットを使用するよう広く注意喚起が行われている。

# 排卵日予測検査薬に関する適正使用調査の結果

出典：一般社団法人日本臨床検査薬協会調査

対象品目	一般的名称	一般用黄体形成ホルモンキット
	販売名 (製造販売業者)	チェックワンLH・II 排卵日予測検査薬 (株式会社アラクス) ハイトスターH (株式会社ミズホメディイ) P-チェック・LH クリアリー (株式会社ミズホメディイ) ドゥーテストLHa (ロート製薬株式会社) クリアブルー排卵日予測テスト (アリーア メディカル株式会社) ウー・マン チェックLH (不二ラテックス株式会社)
調査期間		1年目 (平成28年11月15日～平成29年11月14日) 2年目 (平成29年11月15日～平成30年11月14日) (本期間中に製造販売業者に返送されたアンケート葉書)
総回答数		2070件 (1年目：1057件、2年目：1013件)

購入目的：適正な目的(2063件:99.7%) 避妊目的(6件:0.3%)

※避妊目的は1年目が4件、2年目が2件と減少している。

情報提供：薬剤師による情報提供(83.9%) その理解度は97.5%であった。

※2回目以降の使用による説明不要やデリケートな内容であることが情報提供率が少し低くなった原因と考察している。

使用後の確認：96.1%の人が自分で判定できたと回答している。

適切な情報提供により、OTC検査薬は適正に使用されていることが明らかとなっている。



### (1) 一般用検査薬の意義・取扱い・影響等に関するご意見

✓セルフケアの意識は高めてくべき。適正で安全に健康状態の確認ができることを目指していかないといけない。

- ・OTC薬協と関係団体では、学校教育の場を中心に、健康教育支援に取り組みを始めており、くすりに係わるあらゆる場(薬物乱用防止教育、くすり教育など)において、健康三原則(栄養、運動、睡眠)に基づく健康教育の定着を目指している。

(添付資料1-①②③参照)

- ・そのための成功事例づくり、関係者(教諭、養護教諭、学校薬剤師など)への支援をスタートしました。また、エビデンスづくりなども併せて取り組む予定です。
- ・さらに、ヘルスリテラシー教育が座学だけでなく、日常生活の中で活かした知識とノウハウとなるように薬剤師など専門家支援のもと、国民に効き目と安全性に優れたOTC医薬品や検査薬が選択肢のひとつとして提供できるための働きかけと環境整備に取り組んでいる。

## (1) 一般用検査薬の意義・取扱い・影響等に関するご意見

✓ 体外診断用医薬品が認められて10年も経つので、測定に用いられる「検体」及び「検査項目」の組み合わせ表を見直したうえで、議論を進めるべきではないか。

業界団体において、現行の一般原則でOTC化が可能と考えられる「検体」とそれに基づく「検査項目」を改めて整理した。

検体	「OTC化の適否」の「○」の数（検査項目）	OTC化意義「○」の数	検査項目	検査目的・領域・分かること など
尿	15項目	6項目	ヘリコバクターピロリ抗体	ヘリコバクターピロリ感染の有無
			脳脊髄膜炎起炎菌莢膜多糖抗原	肺炎球菌感染の有無
			ビリルビン	肝機能因子
			ウロビリノーゲン	肝、胆のう系疾患
			潜血	尿の通り道に出血源あるか
			ケトン体	栄養状態（糖尿病関連）
糞便	6項目	4項目	便潜血	大腸がんの早期発見
			ヘリコバクターピロリ抗原	ヘリコバクターピロリ感染の有無
			ノロウイルス抗原	ノロウイルス感染の有無
			ロタウイルス抗原	ロタウイルス感染の有無
鼻汁	1項目	1項目	インフルエンザウイルス	感染症
唾液	1項目	1項目	ヘモグロビン	歯周病の有無
涙液	1項目	1項目	汎用検査用免疫グロブリンEキット	アレルギー疾患

**(1) 一般用検査薬の意義・取扱い・影響等に関するご意見**

✓ 体外診断用医薬品が認められて10年も経つので、測定に用いられる「検体」及び「検査項目」の組み合わせ表を見直したうえで、議論を進めるべきではないか。

一般原則を改訂することを前提に、侵襲性の低い「検体」の活用と医療機器(判定に際して用いるもの)との組み合わせなども考慮し、「検査項目」を見直した。

検体	「OTC化の適否」の「○」の数(検査項目)	OTC化意義「○」の数	検査項目	検査目的・領域・分かることなど
全血 (穿刺血)	20項目	12項目	グルコース	糖尿病
			グリコヘモグロビンA1c (HbA1c)	糖尿病
			コレステロール (T-CHO)	脂質異常症
			HDL-コレステロール (HDL-C)	脂質異常症
			LDL-コレステロール (LDL-C)	脂質異常症
			トリグリセリド (TG)	脂質異常症
			免疫グロブリンE単一試験・単一結果用多種抗原(アレルゲン特異 IgE)	アレルギー疾患
			3-ヒドロキシ酪酸	糖尿病、ケトアシドーシス
			抗streptolysin O (ASO 抗体価)	溶連菌
			トレポネーマ抗体 (TP 抗体)	梅毒
			B型肝炎ウイルス表面抗原 (HBs 抗原)	感染症
ヒト免疫不全症ウイルス1抗体確認 (HIV-1 特異抗体)	感染症			
鼻腔・ 咽頭拭い液	5項目	5項目	インフルエンザウイルス	感染症
			A群ベータ溶血連鎖球菌抗原	感染症
			マイコプラズマ抗原	感染症
			アデノウイルス	アデノウイルス感染の有無
			ヒトメタニューモウイルス	ヒトメタニューモウイルス感染の有無
口腔内擦過体	2項目	2項目	インフルエンザウイルス	インフルエンザウイルス感染の有無
			RSウイルス	RSウイルス感染の有無

## (2) 血液検体等の侵襲性に関するご意見

✓ 血液そのものが感染性を有するかもしれず、扱う人のリテラシーも重要。

- ・穿刺血を検体としている以上は、一定程度の感染性があるというリスクは避けられないが、この10年の技術進歩により開発されている再使用不可で針刺し事故の起きないランセット※を活用することで、そのリスク低減をはかる。
- ・医療用の自宅で行う穿刺血を用いた血糖測定器について、平成22年から23年にかけて、適正使用を促すPMDA医療安全情報が発出されているが、そのような取り組みの結果、適切に使用されることが進んでいるのではないか。
- ・上記の状況を踏まえて、今般、OTC検査薬の穿刺血によるガイドラインを整備し、薬剤師など専門家の協力を得て、正しい使い方と廃棄方法を徹底することで、十分なリスク低減をはかることが可能ではないか。

※穿刺針(刃)とそれを格納するホルダー、及び保護キャップから構成され、微量採血をする医療機器。穿刺後は針が自動的に本体内部に格納され、安全性を担保。

## (2) 血液検体等の侵襲性に関するご意見

✓ 日本では安く医療を受けられるのに、自分で採血する必要はないし、何故このような議論が出てきたのかわからない。

- ・「2040年問題」により国内では大きな環境変化が進んでいる。65歳以上の高齢者人口は2040年頃にピークを迎える。2次医療圏単位で見ると、2025年から2040年にかけては65歳以上人口が増加する地域135の医療圏と減少する地域194の医療圏に分かれ、多くの地域で生産年齢人口が急減する。(添付資料2-①参照)
- ・上記により、一般医療の格差が広がり、「日頃のちょっとした手助け」が得られず、生活の支えが必要と思われる高齢者の世帯は、2040年には230万世帯(2015年比1.4倍)に増加するとの予測が報告されている。<sup>※</sup>
- ・地域の医療リソースが減少し、常に医療機関を訪れて診療を受けることが困難になりつつある場合でも、OTC検査薬を活用し、その結果をもとに医師のアドバイスを受けるような環境を整える必要があるのではないか。  
(添付資料2-②参照)
- ・医療機関のない地域、患者が診察にいけない時など、オンライン診療で対応することもあると理解している。近年は、咳や熱などの急性疾患と共に慢性疾患での活用が進みつつある。そのようにオンライン診療を受けている患者は、OTC検査薬など活用したセルフモニタリングやセルフチェックの必要性があるのではないか。  
(添付資料2-③④⑤参照)
- ・OTC検査薬の結果を記録し、使用者から医師や薬剤師にフィードバックすることで、よりの確な診療・服薬指導の実施につながるのではないか。

### (3) 使用者の行動に関するご意見

✓ 結果によっては、消費者に対して将来のリスクを余計に煽ることにつながらないか。

- ・一般用検査薬は現在の状態をチェックするものであり、使用者がその結果から自ら疾患の有無を判断するものではない。検査結果やその示し方が使用者にとって将来のリスクを煽るものにつながってはならない。  
そのために、メーカーからの啓発活動と共に、提供時には、薬局薬剤師など専門家から使用方法含めた注意事項など十分な説明を実施する。
- ・上記活動を徹底していくため、メーカーからは、薬剤師が使用者に対してOTC検査の使用方法など分かりやすく説明するための資材を提供する。  
また使用者が検査結果を記録し、医師や薬剤師と共有できるような環境整備に取り組んでいく。  
OTC検査薬は、あくまで医療機関で行う検査を補完するものであり、患者のフォローアップをよりの的確に行うものであって、患者自身が自己診断に使うものではないことをきちんと伝えていく。

# OTC薬協・臨薬協がOTC化を要望する穿刺血を用いた検査項目



現在の、一般用検査薬の導入に関する一般原則について（H26.12.5）では、方法及び性能に以下の原則がある。

## ア) 検体

- ①検体から得られる検査結果の臨床的意義が確立されていること。
- ②検査に必要な量が容易に採取できるなど使用者の負担が少ないこと。
- ③検査手順において特別な器具及び処理を必要としないこと。

これらの条件から、尿、糞便、鼻汁、唾液、涙液など採取に際して侵襲のないものが検体として適当である。

検体の採取に採血や穿刺等を伴う行為であれば、「侵襲がある」と考える。具体的な検体として、穿刺血、咽頭拭い液、口腔内擦過検体などが考えられる。

	用途	検査項目	一般的名称	一般用検査薬としての目的案※	クラス 分類
生活習慣病に関する検査	血糖	グルコース	自己検査用グルコースキット	血中のブドウ糖の状態を測定し、糖尿病の早期発見や日常の健康管理を目的とする	Ⅲ※
		グリコヘモグロビンA1c	グリコヘモグロビンA1cキット		I
	血中脂質	コレステロール(T-CHO)	コレステロールキット	血中の脂質を測定し、脂質異常症などの早期発見や日常の健康管理を目的とする	I
		HDL-コレステロール(HDL-C)	HDL-コレステロールキット		I
		LDL-コレステロール(LDL-C)	LDL-コレステロールキット		I
		トリグリセライド(TG)	トリグリセライドキット		I
	健康状態を知るための検査	アレルギー	アレルギー特異IgE	免疫グロブリンE単一試験 複数検査用の多種抗原キット	アレルギーに対する特異的IgEを測定する。(アレルギー症状の原因を推定する)

※ グルコースキットはクラス I であるが、自己検査用グルコースキットは一般生活者が使用することからクラスⅢに分類されている。

# OTC薬協・臨薬協がOTC化を要望する穿刺血を用いた検査項目



「一般用検査薬の導入に関する一般原則について」(H26.12.5)において、方法及び性能に関する以下の原則があり、各品目で別途、測定機器の使用、判定方法の課題がある。

## ウ) 方法

- ①検査手順が簡便であること。
- ②判定に際してハンディタイプなどで、大型の機器等は用いず容易にできること。
- ③短時間に情報が得られるものであること。

## エ) 性能

適正な性能（感度、正確性、精密性）を有し、特に感度については、製品間の差による混乱を生じないように配慮することが必要である。また、定性、または半定量のものについて、判定の説明は統一することが適当と考えられる。

	用途	検査項目	測定機器の要否	判定方法 (定性/半定量/定量)
生活習慣病に関する検査	血糖	グルコース	必要 ..... 不要	定量 ..... 半定量
		グリコヘモグロビンA1c	必要	定量
	血中脂質	コレステロール (T-CHO)	必要 ..... 不要	定量 ..... 半定量
		HDL-コレステロール (HDL-C)	必要	定量
		LDL-コレステロール (LDL-C)	必要	定量
		トリグリセライド (TG)	必要 ..... 不要	定量 ..... 半定量
健康状態を知るための検査	アレルゲン	アレルゲン特異IgE	不要	定性



- 血液は、自覚できない健康情報の宝庫であり、侵襲の少ない穿刺血を用いることで、自身の様々な健康状態を知ることができる。
- 健康診断や人間ドック以外にも健康状態を知る機会、選択肢が提供できる。
- 疾病の早期発見と医療機関受診へのきっかけとなり、早期治療につながる。
- 使用者が、OTC検査薬の結果を記録し、医師・薬剤師にフィードバックすることにより、的確な診療・服薬指導につなげることができる。
- 国民の健康リテラシーの向上につながる。

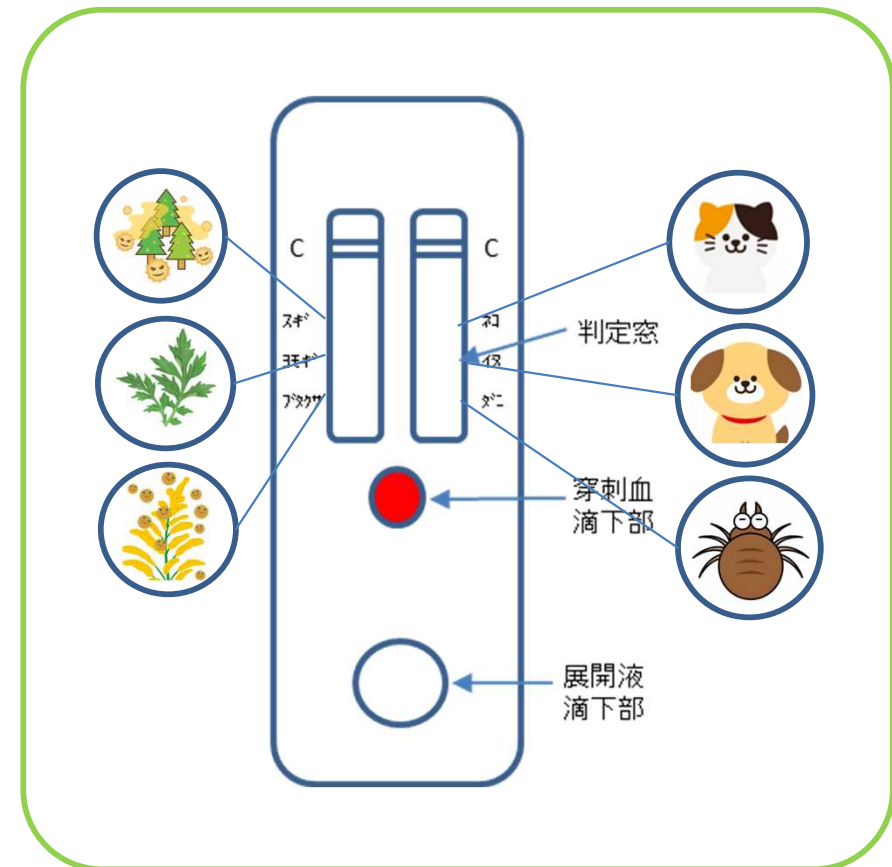
## 血糖値（定量）



## ランセットによる穿刺血採取



## アレルギー（定性）



## 使用方法

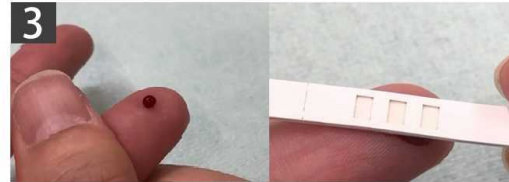


1 血行促進

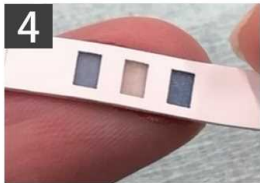
手をグーパー



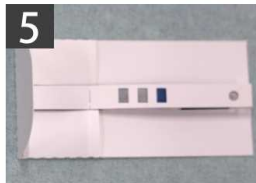
2 針で指先を穿刺する



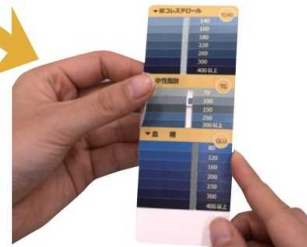
3 血液採取



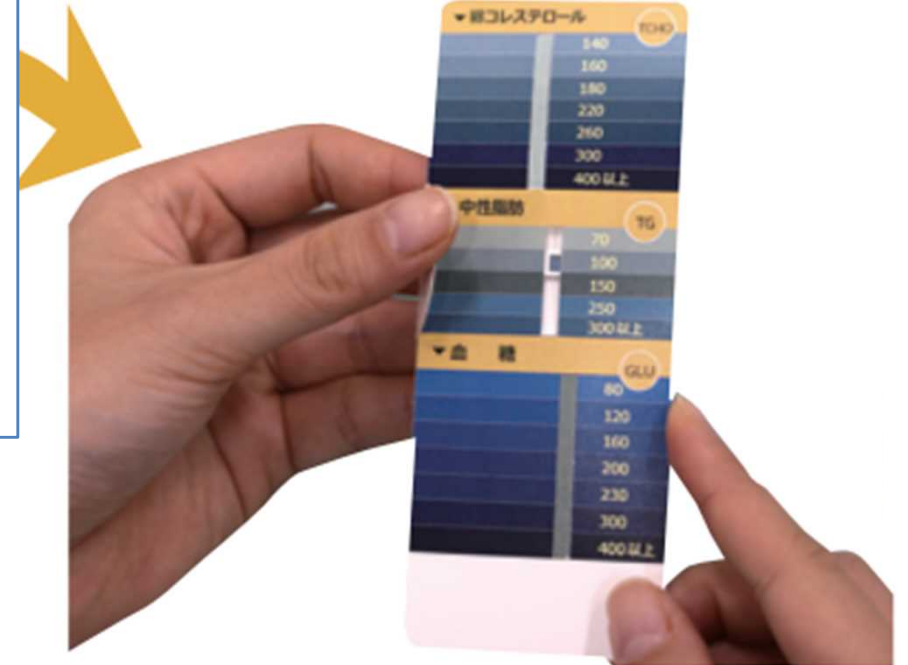
4 目安15秒。  
3つの窓全体が濡れるまで血液を染み込ませる



5 スライダーに  
スティックをセット



標準カラーチャートに、  
スライダーを合わせて測定する



標準カラーチャートに、  
スライダーを合わせて測定する

以下、添付資料

## News Release

報道関係 各位

2023年7月24日

### ヘルスリテラシー向上のための健康教育支援と環境整備に着手 中学生・高校生向け健康教育支援の教材提供をスタート

日本 OTC 医薬品協会（会長：杉本 雅史、以下 OTC 薬協）は、本日、生活者のヘルスリテラシー向上のための健康教育支援と環境整備を目的として、中学生と高校生の教育担当者に向けた「くすり教育教材」とその活用に関する「手引き」を OTC 薬協 WEB サイト\*1 に公開したことをお知らせします。

OTC 薬協は、2022 年度に、健康教育プロジェクトを発足させて、小学生や中学生、高校生に向けたヘルスリテラシー向上のための健康教育について、教育現場の調査に基づき検討してまいりました。

その後、OTC 薬協のアドバイザリーボード\*2 における、これからの健康教育の在り方についてのご意見を踏まえ、本日、一部教材の見直しを行い、手引きと共に公開することとしました。

「手引き」では、「くすり教育教材（中学生と高校生向け）」の構成、各章ごとの目的・ねらい、学習のポイントなどをわかりやすく解説しており、学校教育等で活用する場合の参考としていただける内容となっています。

## \*1: OTC 薬協 WEB サイト

「くすり教育教材（中学生・高校生向け）」～健康教育プロジェクト～

<https://www.jsmi.jp/med/education/index.html>

- 1章「健康でいるために」
- 2章「薬とは」
- 3章「薬の剤形と特徴」
- 4章「薬を正しく使うには」
- 5章「薬の主作用と副作用」
- 6章「薬の規制」
- 7章「ヘルスリテラシーとセルフ  
メディケーション」

今後、小学生に対する健康教育支援にも取組み、くすりに係わるあらゆる場（薬物乱用防止教育、くすり教育など）において、健康三原則（栄養、運動、睡眠）に基づく健康教育の定着を目指します。

また、そのための成功事例づくり、関係者への支援、エビデンスづくりなども併せて行う予定です。

ヘルスリテラシーの向上による健康で豊かな社会実現のため、短期、長期で取り組む課題を整理し、教育現場の実情も加味しながら教育担当者（教諭、養護教諭、学校薬剤師等）の方々へ必要な情報支援を行ってまいります。

## \*2: OTC 薬協アドバイザーボード

2023年2月に発足。セルフケア・セルフメディケーション推進策への提言やOTC医薬品やOTC検査薬などの活用に関連する政策などについて、より広い視野から有識者の意見をうかがう場としています。

<https://www.jsmi.jp/special/board/index.html>

## 参考：ヘルスリテラシー

ヘルスリテラシーは、健康リテラシーとも呼ばれており、自分に必要な健康情報、医療情報を見極める力のことです。

健康や医療についての情報を入手し、理解し、その情報の確かさを評価し、活用できる知識力や意欲、能力など、それがヘルスリテラシーです。

ヘルスリテラシーを向上させることによって、自分の健康増進や疾病予防について正しく判断し、行動することから健やかな心身を作り、生活の質を維持・向上させることができます。

医薬品の適正使用と有効性・安全性の知識・理解を深めることは、国民の役割として法律（医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律第一条の六）で求められており、ヘルスリテラシー向上のための一歩につながります。

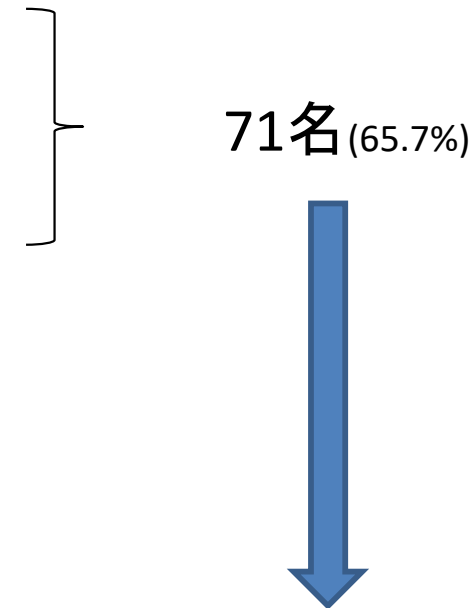
## 健康・くすり教育資材の利用状況（データのダウンロード実績）

期間：2023年4月4日～7月27日

（8/25時点では、143名、152回のダウンロード）

人数：108名 ダウンロード数：116回（複数回を含む）

内訳：学校薬剤師	42名(38.9%)
薬剤師（薬局・病院、企業）	11名(10.2%)
教員（薬科大学・高校等）	18名(16.7%)
製薬企業	10名(9.3%)
その他	
（薬局、医薬品卸等の事務、教育担当）	10名(9.3%)
（業界紙等）	17名(15.7%)



現時点で学校薬剤師やくすり教育に携わる教員などの利用が多く、初期の目的を果たしていると思われる。  
更に活用を拡げるための方策を検討する。

### 71名の使用目的

- 52名(73.2%)：くすり教育、授業などで活用・参考に。
- 3名(4.2%)：市民講座、健康イベントの参考に。
- 6名(8.5%)：薬物乱用防止講座の資料として。
- 10名(14.1%)：その他（社会活動、薬剤師業務の説明閲覧のみ等）

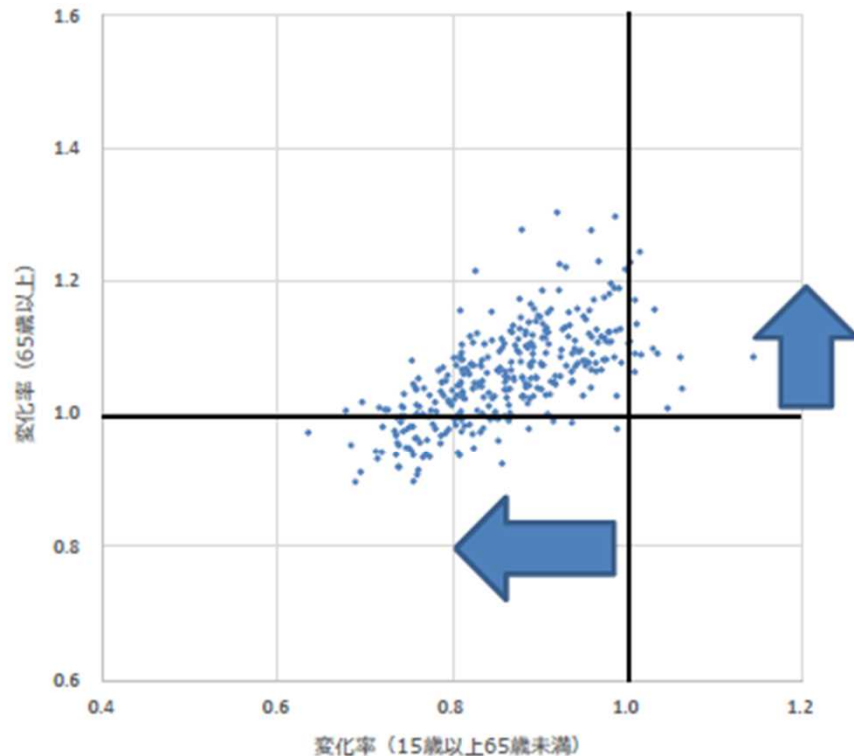
第7回第8次医療計画等に関する検討会 資料1 第8次医療計画、地域医療構想等について(2022年)

人口動態④ 高齢者の減少と現役世代の急減が同時に起こる2次医療圏が数多く発生する

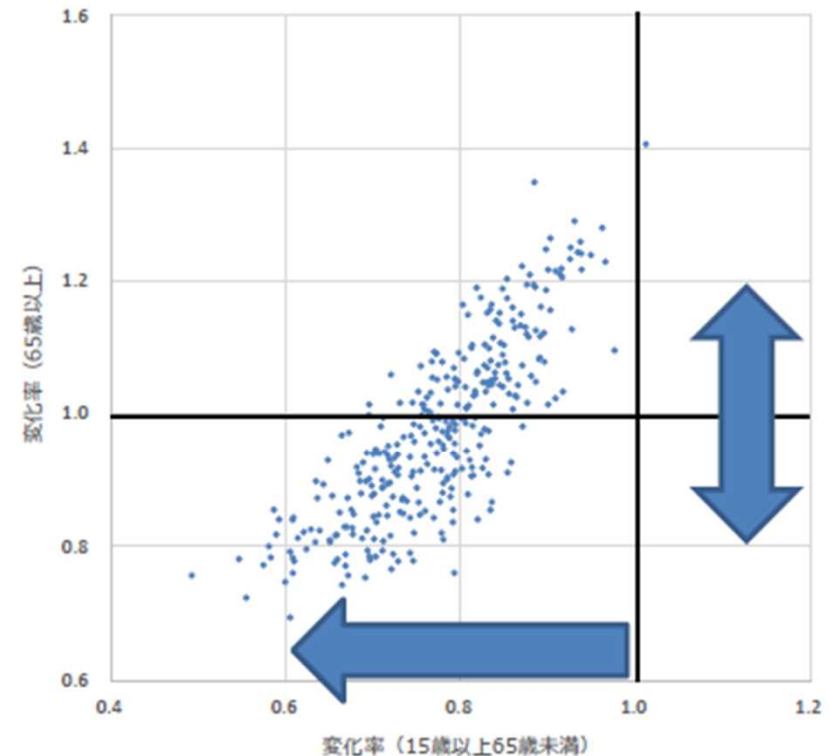
- 2次医療圏単位で見ると、2015年から2025年にかけて、多くの地域で、65歳以上人口の増加と生産年齢人口の減少が起きる。
- 2025年から2040年にかけては、65歳以上人口が増加する地域(135の医療圏)と減少する地域(194の医療圏)に分かれる。また、多くの地域で生産年齢人口が急減する。

2次医療圏ごとの人口変化率

2015年→2025年



2025年→2040年





TMA近未来医療会議 第4クール 2023年4月6日シンポジウム資料

「東京の医師の需要と供給：定性的な視点もふくめ」

中央大学戦略経営研究科教授 真野俊樹氏（東京都医師会）から引用

## まとめ

- 東京の医療需要は増加
- 医師数も多いが、専門化も進んでいる
- 開業医の高齢化もあり、今後の需要に対応できるか、  
都会型の視点が重要

## 情報通信機器を用いた再診・外来診療料に係る傷病名

- 情報通信機器を用いた再診料・外来診療料と対面診療における再診料・外来診療料に係る傷病名の上位25位は以下のとおり。情報通信機器を用いた再診料・外来診療料における傷病名としてはCOVID-19が27.2%と最多であった。
- 対面診療における傷病名と比較すると、呼吸器感染症に類する傷病名が占める割合が高い。

No.	傷病名	令和4年度	
		5月診療月	
		回数	構成比%
計	情報通信機器を用いた再診・外来診療料の算定回数	24,880	100.0%
1	COVID-19	6,765	27.2%
2	アレルギー性鼻炎	6,702	26.9%
3	高血圧症	3,884	15.6%
4	急性上気道炎	3,657	14.7%
5	気管支喘息	3,340	13.4%
6	便秘症	2,805	11.3%
7	急性気管支炎	2,791	11.2%
8	不眠症	2,754	11.1%
9	アレルギー性結膜炎	2,113	8.5%
10	皮脂欠乏症	2,071	8.3%
11	慢性胃炎	2,061	8.3%
12	高コレステロール血症	1,973	7.9%
13	糖尿病	1,791	7.2%
14	湿疹	1,734	7.0%
15	腰痛症	1,687	6.8%
16	急性咽頭炎	1,405	5.6%
17	高脂血症	1,396	5.6%
18	鉄欠乏性貧血	1,345	5.4%
19	アトピー性皮膚炎	1,256	5.0%
20	皮脂欠乏性湿疹	1,210	4.9%
21	コロナウイルス感染症	1,128	4.5%
22	骨粗鬆症	1,113	4.5%
23	逆流性食道炎	1,108	4.5%
24	胃潰瘍	1,079	4.3%
25	頭痛	1,007	4.0%

No.	傷病名	令和4年度	
		5月診療月	
		回数	構成比%
計	対面による再診・外来診療料の算定回数	62,206,981	100.0%
1	高血圧症	19,348,105	31.1%
2	アレルギー性鼻炎	8,944,790	14.4%
3	不眠症	8,730,208	14.0%
4	便秘症	8,206,032	13.2%
5	糖尿病	8,024,647	12.9%
6	高コレステロール血症	7,770,380	12.5%
7	慢性胃炎	7,157,835	11.5%
8	高脂血症	7,092,086	11.4%
9	腰痛症	6,844,633	11.0%
10	骨粗鬆症	5,421,005	8.7%
11	変形性膝関節症	4,636,653	7.5%
12	逆流性食道炎	4,552,906	7.3%
13	2型糖尿病	4,465,986	7.2%
14	脂質異常症	4,446,350	7.1%
15	高尿酸血症	4,366,523	7.0%
16	アレルギー性結膜炎	4,248,100	6.8%
17	気管支喘息	4,179,183	6.7%
18	維持療法の必要な難治性逆流性食道炎	4,048,947	6.5%
19	湿疹	3,521,267	5.7%
20	狭心症	3,318,654	5.3%
21	近視性乱視	3,202,902	5.1%
22	鉄欠乏性貧血	3,141,966	5.1%
23	皮脂欠乏症	3,079,372	5.0%
24	胃潰瘍	3,032,102	4.9%
25	肩関節周囲炎	2,897,913	4.7%

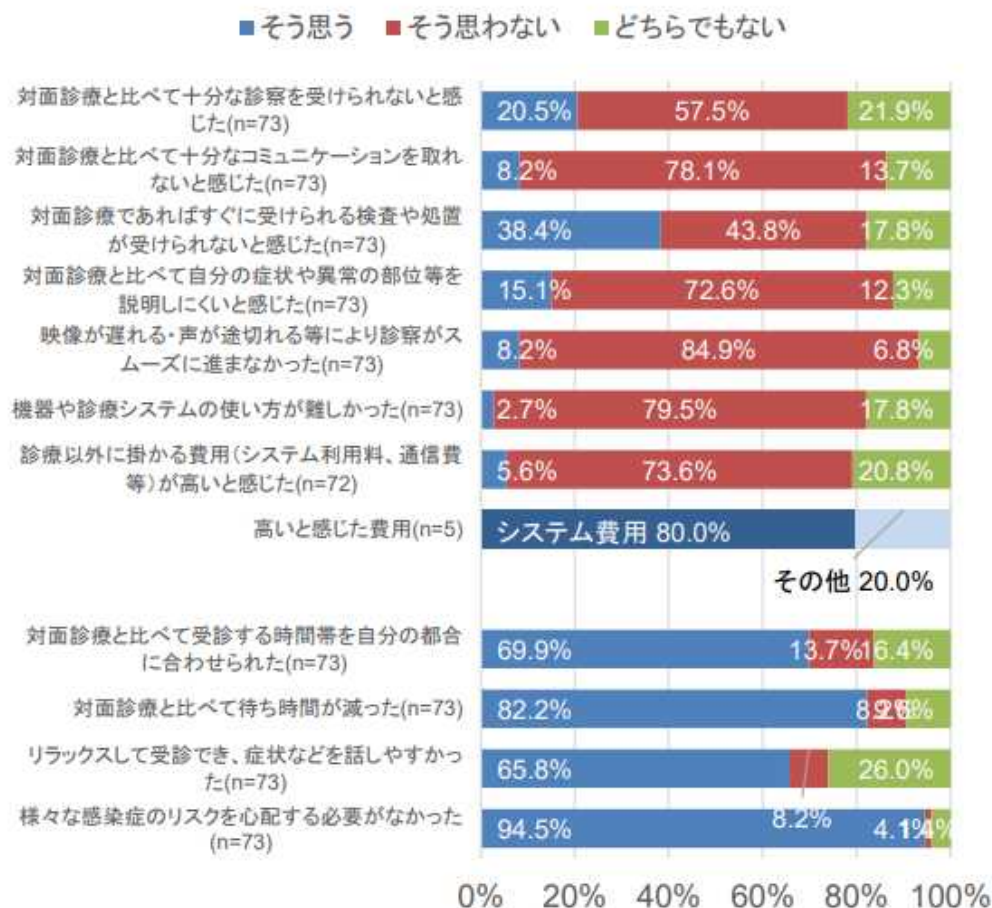
出典：NDBデータ（令和4年5月診療分）※複数の主傷病名が記載されている場合はそれぞれカウントしている

出典：2023年7月23日 令和5年度第4回中医協 入院・外来医療等の調査・評価分科会（厚労省提出資料）

# オンライン診療を受けた患者の状況等(患者調査)

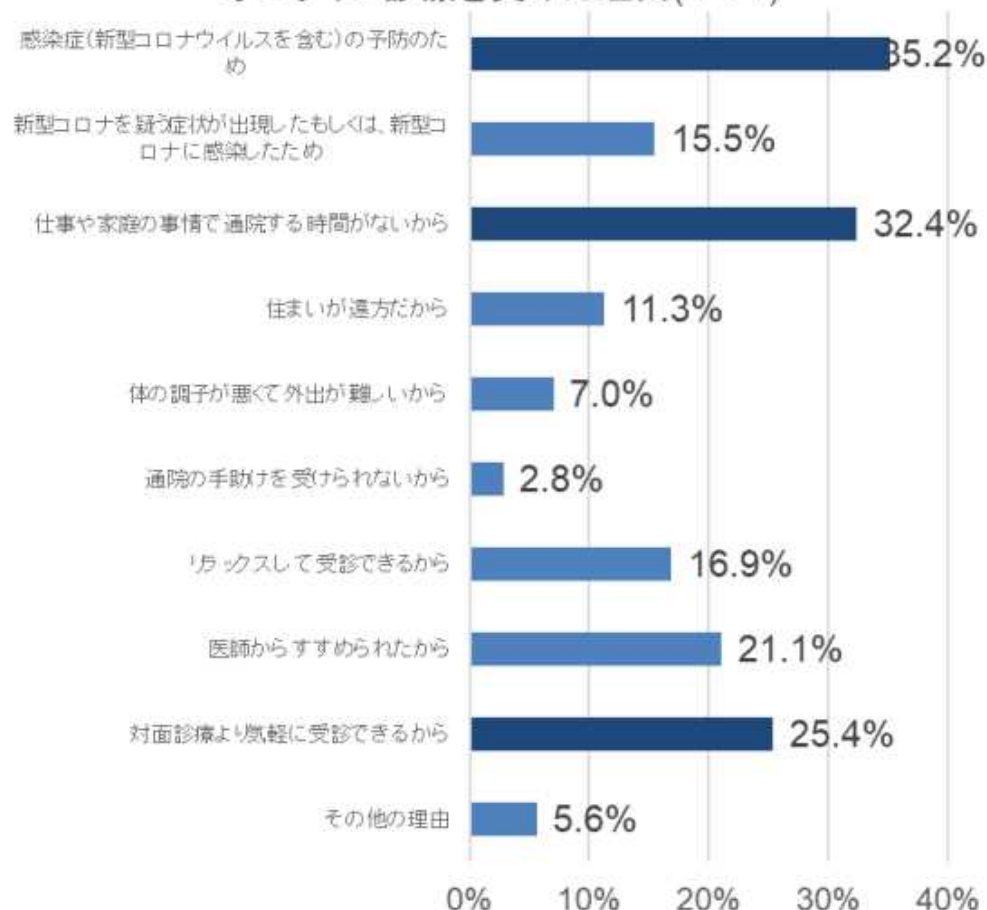
- オンライン診療の受診経験が「ある」と回答した患者を対象とした、オンライン診療を受診した感想については、「対面診療であればすぐに受けられる検査や処置が受けられないと感じた」が38.4%、「対面診療と比べて十分な診療を受けられないと感じた」が20.5%であった。「診療以外に掛かる費用を高いと感じた」が5.6%であった。また、「様々な感染症のリスクを心配する必要がなかった」は94.5%であった。
- オンライン診療を受けた理由について、「感染症の予防のため」「通院する時間がないから」が多かった。

オンライン診療を受診した感想



出典: 令和4年度入院・外来医療等における実態調査(外来患者票)

オンライン診療を受けた理由(n=71)



出典: 中医協資料(令和5年7月20日)

# オンライン診療その他の遠隔医療の推進に向けた基本方針

(以下、基本方針の6, 7ページから引用)

## II オンライン診療等(医師と患者間での遠隔医療)

### 1 期待される役割

#### (1)医療への時間、場面の制約の少なさに起因するもの

- ① 通院に伴う患者負担の軽減及び継続治療の実現 オンライン診療等は、患者の居宅等と医療機関との距離移動手段、患者の心身の状態などのため頻繁な移動が難しい場合に通院に伴う負担を軽減するほか、長期に渡り繰り返しの通院が必要な慢性疾患(難病等を含む。)の治療について、定期的な直接の対面診療の一部をオンライン診療に代替し、医師及び患者の利便性の向上を図ったり、定期的な直接の対面診療にオンライン診療を追加し、医学管理の継続性や服薬コンプライアンス等の向上を図ったりすることを容易にする。医療機関へのアクセスが制限されている場合に特に有効であるが、こうした状況にある患者への医療の提供に当たっては、患者からの求めと患者と医師の相互の信頼関係に基づいて、現場の医師の判断により対面診療を適切に組み合わせてオンライン診療等を活用することは、通院に伴う患者負担の軽減及び継続治療の実現の観点から有用である。
- ② 訪問診療および往診等に伴う医師の負担軽減 訪問診療や往診等が必要な患者について遠隔医療を活用することで、医師が患者の居宅等まで移動する際の時間的負担を軽減する。
- ③ 医療資源の柔軟な活用 近隣地域において専門性の高い医療機関へのアクセスが制限されている診療科や疾患への対応や、救急医療において、遠隔地の専門性の高い医師の助言を受けることが可能となる。そのほか、災害時に局所的に高まる医療需要に限られた医療資源で対応する観点から、遠隔地の医師がトリアージや治療方針に関して現場の医師等に専門的な助言を行うことも可能となる。

#### (2)患者と医師の非接触下での診療に起因するもの

- ① 患者がリラックスした環境での診療の実施 通院等につき大きな負担を感じる患者への診療や、患者の居宅等の日常生活の状況下にある環境での診療が可能となり得る。これにより、患者の受診時の抵抗感が軽減されるとともに、医師とより率直にコミュニケーションを取ることが可能となり得る。例えば、医療機関で過度に緊張してしまう患者や医療機関内で知人に思いがけず出会うことを忌避する患者への対応の際に有効である。
- ② 感染症への感染リスクの軽減 感染症の流行下等において、他者と接触することなく診療を実施できるため、医療従事者及び患者等の感染リスクを軽減することができる。実際に、新型コロナウイルス感染症の流行により医療機関を受診することに抵抗を感じた患者や、自宅や宿泊療養施設で療養する感染症患者への医療提供手段としてオンライン診療が活用された。

## 令和5年度 政府方針

## 経済財政運営と改革の基本方針 2023 について(令和5年6月16日閣議決定)

「OTC医薬品・OTC検査薬の拡大に向けた検討等によるセルフメディケーションの推進」  
(39Pから引用)

## 成長戦略等のフォローアップ(令和5年6月16日内閣官房)

セルフケア・セルフメディケーションを進めるとともに、薬局で市販されるOTC検査薬等の拡大に向けて、引き続き、医療用検査薬等の検査項目ごとに課題整理を行う。  
(6Pから引用)

## 第四期医療費適正化基本方針について(令和5年6月29日)

## ＜国民の取組＞

OTC医薬品の適切な使用など、症状や状況に応じた適切な行動をとることが重要であることや、マイナポータル等を通じた自身の健康情報の把握が期待されることを追記  
(17Pから引用)

医師や薬剤師など専門家の支援により適切なセルフメディケーションを普及啓発

## セルフメディケーション・セルフケアの範囲



## ヘルスリテラシーの向上

セルフメディケーション  
教育体制の整備

セルフメディケーション  
の日／週間の定着



医師や薬剤師など専門  
家による支援